青年期の交友関係における同調と心理的距離

上 野 行 良¹ 上 瀬 由美子² 松 井 豊³ 福 富 護⁴

CONFORMITY AND PSYCHOLOGICAL DISTANCE IN ADOLESCENT FRIENDSHIP

Yukinaga UENO, Yumiko KAMISE, Yutaka MATSUI AND Mamoru FUKUTOMI

The purpose of this study was to investigate the relation between adolescents' views on friendship and personality characteristics. Six hundred twenty (620) randomly-sampled high-school students completed a questionnaire. Hayashi's Quantification Method of the Third Type showed two more-or-less independent dimensions for the views: friends as a source of conformity and preferred psychological distance to them. The students, in accordance with the above two dimensions, were classified into four types: independent, individual, surface, and close friendship seekers. Analyses indicated that these types were related to such personality characteristics as inferiority, family-adjustment, public self-consciousness, frequency of problem-behavior thoughts, and purposes in life. Surface friendship, with high conformity but more psychological distance to each other, might characterize contemporary youth relationship in Japan. The students who viewed friendship in this way, in general, loved family more and were better socially adjusted, but the males of this category felt inferiority and thought about problem behaviors more frequently.

Key words: adolescence, friendship, psychological distance, conformity, contemporary adolescent.

本研究は、青年期における交友関係のスタイルとして、友人への同調と友人との心理的距離のとり方の2点に焦点をあて、心理特性等との関連を検討するものである。

松井(1990)は、現代青年の交友関係の特徴に関する研究知見を整理した結果、友人との全人的な融合を避けて、距離を保ち、一面的で部分的な関係にとどめようとする疎隔的、部分的な志向性が現れていること、すなわち心理的距離を大きくとろうとする傾向がみられることが共通して指摘されているとまとめている。しかし現代青年がこのような心理的距離を大きくとろうとする傾向をもつことについての指摘の多くは、実

証的な研究に基づくものではなく、洞察的論考に留まっている。その中で東京都生活文化局(1985)は、東京都内の高校生を対象に無作為抽出に基づいた実態調査を行っている。その結果によれば、交友関係において「お互いに甘えすぎない」「互いの領分にふみこまない」等、友人に対して心理的に距離をおいたつき合い方をしているのは、青年の約3割であり、すべての青年が対人関係に距離をおいているとはいえない。

他の青年に比べ、友人との心理的距離を大きくとっている青年の特性を実証的に分析した研究に、堀・松井(1981)がある。堀・松井は数量化Ⅲ類を用いて、高校生の友人関係の構造を分析した。その結果、高校生の交友として「友人との心理的距離」と「実際に気を使う」の2側面が見いだされ、この2側面を組み合わせることにより、「つくす交友」「とけあう交友」「クールな交友」「投げやりな交友」の4類型が設定された。4

¹ 福岡県立大学 (Fukuoka Prefectural University)

² 東京女子大学 (Tokyo Woman's Christian University)

³ 聖心女子大学 (University of the Sacred Heart)

⁴ 東京学芸大学 (Tokyo Gakugei University)

類型のうち、友人との距離を大きくとる「クールな交友」をしている者は、他の交友類型に比べ、精神的に疲れていることが明らかにされた。

以上のように、現代青年の交友関係においては、友人との心理的距離のとり方が重要な側面の1つになっている。しかし友人関係に依存し、密着したつき合い方をすることが、必ずしも成熟した人間関係であるとはいえない。自律性が高いことが、友人との心理的距離を大きくしている可能性を考慮すれば、友人と心理的距離をおくことが、必ずしも否定的な意味をもつとは限らず、むしろ発達的に望ましい面を有しているとも考えられる。

また、青年期の交友関係においては、集団的なつき合いや仲間集団への同調性も重視されている。東京都生活文化局(1985)の調査において、「一人の友人と特別親しくするよりはグループ全体で仲よく」したがる青年が多いことが明らかにされている。いじめの研究においても、いじめの背後には、集団内での同調行動からの逸脱者に対する否定的な態度や、大勢の他者に対する同調傾性が潜んでいると考察されている(竹村・高木, 1988)。青年の仲間集団の構成員は、同じクラスの友人がほとんどであり、共通の目的や価値観のために形成されたものではない。そのため、仲間はずれにならないようにして、とにかく一緒に行動し、遅れたり外れたりしないようにする消極的な同調行動傾向が、青年の友人関係に重要な役割を果たしていると推察される。

一般に、同調性が高いことは、仲間集団への密着性を示すものと考えることができる。しかし現代青年の特徴として、心理的距離が大きいこと、すなわち心理的な密接さが低いことも指摘されていることは、現代においては、仲間集団への同調性と心理的な密接さが、必ずしも一致していないことを示唆している。心理的距離が内面の密接さを意味し、同調性が外面的な行為を意味していると考え、現代青年においては、内面的な密接さと、外面的な行為とが区別されていることが推察される。

このような内面的な心理的距離の大きさと、外面的な同調行動の2側面を同時に検討すれば、心理的距離や同調性の意義をより明確にすることが可能になる。たとえば、心理的な距離を大きくとっていても、行動的には同調的であるならば、その青年の心理的距離の大きさは、自律性の高さを示すものとはいえないであろう。

以上の論考に基づき、本研究では、青年の交友関係

の中でも、友人との心理的距離のとり方と共に、友人に対する消極的な同調性に焦点をあてて分析を行い、これらの2側面から、交友関係を類型化する。

また、交友関係の各類型の特性を明確にするために、青年期の心理特性として重要と考えられる4種の心理特性との関連分析を行う。対人関係や対人意識と相互に強く影響し合うと考えられる自己に対する意識や評価として、第1に、他者からの評価を強く意識し、自分がどうみられているかを気にする公的自意識の強さ、第2に、劣等感との関連を分析する。第3に、青年期に強くみられる精神的な悩みや葛藤との関連をみるために、家出、自殺、暴力などの問題行動を念慮する傾向との関連分析を行う。第4に、対人関係の基盤となると同時に、友人関係への依存的態度に対する影響が強いと考えられる家族との関係をみるために、自分の家庭や家族への評価や家庭への適応との関連を分析する。

さらに、対人関係上の特徴は、生き方と相互に影響し合うと考えられる。現代青年は、社会への関心が希薄であるといわれている(久世・宗方・和田・後藤・浅野・宮沢・二宮・大野・内山・鄭, 1986)。また岡田(1991)は、現代青年が仲間内の中に自閉し、集団外には関心がない傾向があると考え、「集団内自閉」と命名している。このような生活態度は、対人関係のあり方と関連していると考えられる。そこで、第5の特性として、青年の望ましいと考える生き方と、交友関係のあり方との関係を検討する。

なお従来の研究においては、考察的研究や、特定の大学の学生等を対象とした調査が中心となっていた。しかし青年の多様性を考慮すれば、無作為抽出に基づいた調査が必要であると考えられる。そのため本研究では、以上の検証にあたり、首都圏の高校生を母集団とした無作為抽出調査を行う。

方 法

調査対象者と実施方法

母集団は、東京50キロ圏内に在住する15～18歳の青年で、高校に在学する者である。以下の手順で無作為二段抽出を行った。対象地域を町丁単位の地点に分けて、90地点を無作為抽出し、各地の住民基本台帳から該当年齢者を10名ずつ無作為抽出した。なお実施時に在学していないことが明らかになった被調査者は、対象外とした。調査は訪問留置法・密封回収によって実施した。調査期間は1991年5月20日～30日。調査対象者数は900名、有効回収数は620名(男子309名、女子311

名)であった。有効回収率は68.9%である。

質問項目⁵

(1)交友関係について 友人との心理的距離については、東京都生活文化局(1985)および堀・松井(1985)から3項目を選び、使用した。友人への同調については、東京都生活文化局(1982)から2項目を選び、さらに独自の項目を2項目作成し、計4項目を使用した(TABLE 1)。設問は多重回答形式で行った。

(2)心理尺度 ①公的自意識尺度 菅原(1984)による自意識尺度日本語版の公的自意識に関する項目から、内容を代表すると考えられる4項目を選び、使用した。「人に見られていると、つかっこうをつけてしまう」「自分の言ったことを他人がどう受け取ったか気になる」「自分の外見を気にする方だ」「人前で何かするとき、自分のしぐさや姿が気になる」である。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。②劣等感尺度 自分を劣った人間だと考える程度を示す尺度で、本調査において独自に項目を作成した。「何かにつけ人より劣っているなど感じる事が多い」「自分をダメな人間だと思いがしばしばある」「何に対しても自信をもってやる事ができない」の3項目である。「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で回答を求めた。③問題行動念慮尺度 自殺や家出などの問題行動をしたいと思う程度を示す尺度で、東京都生活文化局(1985)を参考に4項目を作成した。「学校をやめたいと思うことがある」「死にたいと思うことがある」「家出をしたいと思うことがある」「人をなぐりたと思うことがある」である。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。④家庭適応尺度 自分の家庭をよいと感じ、家族から愛されていると感じる程度を示す尺度で、東京都生活文化局(1985)を参考に、本調査において独自に項目を作成した。「父母の仲はよその家庭に比べてよい方だと思う」「私は家族から愛されていると思う」「家では、両親はお互いに協力しあっている」「私の家族の暮らしは恵まれている方だ」「将来は今の様な家庭を自分でもつくりたいと思う」の5項目である。設問は、多重回答形式で行った。

(3)望む生き方 金持ちになる、家庭を大切にする、有名になるなどの13の生き方を提示し(TABLE 2)、「どの

ような生き方をしたい」と思うかを、多重回答形式で求めた。

結 果

交友関係の類型化

交友関係に関する7項目について、それぞれ「あてはまる」と回答したか否かで2カテゴリーとし、計14カテゴリーに対して数量化Ⅲ類による解析を行った(TABLE 1)。第1軸は、「流行遅れになるのはイヤだ」「できるだけ仲間と同じように行動したい」「何をするにも皆と一緒にだと安心する」「仲間はズレにされるのは絶対にイヤだ」のカテゴリースコアが高い。以上の項目はいずれも友人への同調性に関する項目である。したがって第1軸は、友人への同調性に関する軸であると解釈される。第2軸は「相手の考えていることに口をはさまない」「お互いの領分にふみこまない」「お互いに、相手に甘えすぎない」のカテゴリースコアが高い。以上の項目は友人との心理的距離のおき方に関する項目である。したがって第2軸は、友人との心理的距離に関する軸であると解釈される。第3軸以降は解釈が困難であった。

TABLE 1 交友関係に関する項目と数量化理論Ⅲ類の結果
(○は「あてはまる」、×は「あてはまらない」)

項 目	該当率(%)	第1軸	第2軸
[友人への同調に関する項目]			
できるだけ仲間と同じように行	○ 30.0	-3.65	-0.720
動したい	× 70.0	1.56	0.318
何をするにも皆と一緒にだと安心	○ 33.9	-3.585	-0.125
する	× 66.1	1.837	0.074
仲間はズレにされるのは絶対に	○ 56.9	-2.260	-0.166
イヤだ	× 43.1	2.989	0.235
流行遅れになるのはイヤだ	○ 26.9	-3.932	-0.715
	× 73.1	1.447	0.209
[友人との距離に関する項目]			
相手の考えていることに口をは	○ 11.9	-0.428	7.887
さまない	× 88.1	0.058	-1.061
お互いに、相手に甘えすぎない	○ 31.6	-0.508	4.920
	× 68.4	0.235	-2.265
お互いの領分にふみこまない	○ 22.6	-0.514	7.404
	× 77.4	0.150	-2.151
固 有 値		0.280	0.194

⁵ 本研究のデータは民間企業の依頼により無作為抽出法によって現代青年の意識を多側面から調査した結果の一部であり、有効回収率を高めるために1側面に関する質問項目を減らさざるを得なかった。しかし無作為抽出法による貴重なデータであると判断し、報告する次第である。

そこで、この交友関係の2側面を組合わせ、交友関係の類型化を行った(FIGURE 1)。すなわち友人との心理的距離が大きいか小さいかと、友人への同調性が高い

か低いかの組合わせによって、以下の4類型を設定した。1.表面的交友（心理的距離大，同調高）：相手に口をはさまず，甘えないが，仲間はずれは嫌で，同調的。2.個別の交友（心理的距離大，同調低）：相手に口をはさまず，甘えない。仲間と同調せず，仲間はずれを気にしない。3.密着的交友（心理的距離小，同調高）：相手に口をはさみ，甘え，仲間と同調的で，仲間はずれが恐い。4.独立の交友（心理的距離小，同調低）：相手に口をはさみ，甘える一方，仲間と同調せず，仲間はずれを気にしない。

FIGURE 1 交友関係の4群と各群の構成

以上の交友関係の4類型を比較するために、以下の手続によって被調査者を4群に分けた。まず友人への同調性に関する4項目に対し、2項目以上に対して「あてはまる」と回答した者を同調高群、1項目以下の者を同調低群とした（高群44.4%、低群55.6%）。また、友人との心理的距離に関する3項目に対し、1項目以上に対して「あてはまる」と回答した者を心理的距離高群、1項目も該当しなかった者を心理的距離低群とした（高群46.3%、低群53.7%）。この友人への同調の高群と低群、友人との心理的距離の高群と低群を組合わせ、4群に分けた。なお以上の手続は、各群に含まれる人数がより等しくなるように考慮した結果、採択したものである。各類型に含まれる被調査者の割合は、FIGURE 1のようになった。

各群の男女構成比を比較したところ、有意な差はみられなかった ($\chi^2=.798$, $df=3$)。また、学年の構成比についても、男女ともに有意な差はみられなかった(男子 $\chi^2=2.453$, $df=6$; 女子 $\chi^2=3.611$, $df=6$)。

心理尺度の得点化と信頼性

公的自意識尺度と問題行動念慮尺度は「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点として得点化した。劣等感尺度は「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として得点化した。家庭適応尺度は、項目が選択された場合を1点、されなかった場合

を0点として得点化した。各尺度の信頼性係数を求めたところ、公的自意識尺度は $\alpha=.75$ 、劣等感尺度は $\alpha=.70$ 、問題行動念慮尺度は $\alpha=.73$ 、家庭適応尺度は $\alpha_{20}=.73$ であった。

交友関係と心理尺度との関連

交友関係の4類型と、公的自意識、劣等感、問題行動念慮、家庭適応との関連をみるために男女別に一元配置の分散分析を行った (TABLE 2)。

TABLE 2 交友関係4群間の心理尺度の平均値の差の検定結果

		独立群	個別群	密着群	表面群	F値
公的自意識	男	13.9(3.45)	14.3(3.51)	16.8(2.38)	17.1(2.29)	22.59**
	女	15.2(3.05)	15.3(2.59)	17.0(2.50)	17.3(2.34)	12.71**
劣等感	男	5.4(1.62)	5.5(1.62)	5.7(1.49)	6.2(1.58)	3.54**
	女	6.0(1.74)	6.0(1.65)	6.2(1.56)	6.6(1.87)	1.95
問題行動念慮	男	10.8(3.82)	9.6(3.61)	11.4(3.90)	11.5(4.19)	3.91*
	女	11.0(4.07)	10.9(4.23)	11.0(4.14)	10.5(4.35)	0.20
家庭適応	男	1.7(1.68)	2.2(1.63)	2.3(1.68)	2.3(1.74)	2.96*
	女	1.7(1.59)	2.4(1.69)	2.4(1.73)	2.7(1.63)	4.54**

() 内は標準偏差 ** $p<.01$ * $p<.05$

まず男子では、公的自意識について有意水準1%で有意な差がみられた ($F(3,305)=22.586$)。Schefféによる多重比較では、表面群・密着群と独立群・個別群との間にそれぞれ有意な差がみられた。すなわち同調性の高い群の方が、公的自意識が高かった。また劣等感についても、有意水準1%で有意な差がみられた ($F(3,304)=3.912$)。多重比較では、表面群と独立群・個別群との間に有意な差がみられた。表面群は、他の2群に比べ、劣等感をより強く感じていた。問題行動については、有意水準5%で有意な差がみられた ($F(3,305)=3.541$)。多重比較では、表面群と個別群との間に有意な差がみられた。家庭適応については、有意水準5%で有意な差がみられた ($F(3,305)=2.960$)。多重比較では、有意な差はみられなかったが、平均値をみると、独立群が他の群より低い傾向がみられた。

女子では、公的自意識について有意水準1%で有意な差がみられた ($F(3,307)=12.708$)。多重比較では、表面群・密着群と独立群・個別群との間にそれぞれ有意な差がみられた。この結果は男子と同一であり、女子でも同調性の高い群の方が、公的自意識が高かった。家庭適応については、有意水準1%で有意な差がみられ、表面群の方が家庭適応が高かった。劣等感 ($F(3,305)=1.947$) と問題行動 ($F(3,307)=.199$) については、

有意な差はみられなかった。

交友関係と望む生き方との関連

望む生き方の選択率を交友関係の4群別に集計したところ、TABLE 3 のようになった。4群を比較すると、男子では、「金持ちになって豊かに暮らす」「仕事と家庭を両立させる」「子供とよく遊ぶ」「家庭を大切にする」「周囲との調和を考えて生きてゆく」「社会や人のためにつくす」「社会改革をめざして活躍する」において有意な差がみられた。「金持ち」については密着群の選択率が高い。「子供」「家庭」「家庭と仕事の両立」については、表面群や密着群の選択率が高い。また「周囲との調和」や「社会や人のため」については、表面群や個別群の選択率が高い。「社会改革」については個別群の選択率が高い。

女子では「金持ちになって豊かに暮らす」「子供とよく遊ぶ」「家庭を大切にする」「周囲との調和を考えて生きてゆく」「自分の楽しみを追及する」において有意

な差がみられた。「金持ち」については個別群の選択率が特に低くなっている。「家庭」や「周囲との調和」や「自分の楽しみ」の追及については、表面群の選択率が高い。「子供」については密着群と表面群での選択率が高くなっている。

さらに交友関係の4類型と望む生き方との相互の関連を明らかにするために、双対尺度法(西里, 1982)を用いて分析した。交友関係の各4群における生き方の選択率について、交友関係の4群をX値、生き方をY値として男女別に解析した。ただし「社会改革をめざして活動する」「学問の研究を通して真理を明らかにする」の2項目は男女共に、「有名になる」については女子において、選択率が10%以下と低いため、それぞれの解析から除いた。

男子においては、解1の寄与率が72.3%、解2が17.5%であり、二次元空間でデータ構造がほぼ説明できる。解1、解2のスコアを同時に平面にプロットした結果がFIGURE 2である。項目の布置をみると、密着群と表面群の間に、「家庭を大切にする」「子供とよく遊ぶ」「仕事と家庭を両立させる」などの家庭中心の生き方に関する項目が布置している。一方、独立群と個別群の間には、「国際社会で活躍する」「仕事をバリバリこなす」「有名になる」などの社会的な達成を求める生き方や、「環境問題に取り組む」「自分の楽しみを追及する」などが布置している。「社会や人のためにつくす」と「周囲との調和を考えて生きてゆく」向社会的な生き方は、密着群や独立群と離れた位置にあり、個別群や表面群と近接している。

以上のような全体的な布置の中で、交友の4群と近在している生き方をみると、密着群には「金持ちになって豊かに暮らす」や「子供とよく遊ぶ」が近在している。表面群に比較的近接しているのは「家庭を大切にする」であるが、「仕事をバリバリこなす」も近接している。また原点から表面群の方向に「周囲との調和を考えて生きてゆく」がある。個別群に比較的近在しているのは「仕事をバリバリこなす」や「国際社会で活躍する」である。独立群の付近には生き方に関する項目がないが、比較的近接しているのは「自分の楽しみを追及する」である。

女子においては、解1の寄与率が59.7%、解2が25.0%であった。解1と解2のスコアを平面にプロットした結果がFIGURE 3である。項目の布置をみると、解1が密着群と個別群を分離し、解2が表面群と独立群を分離している。全体的な布置をみると、密着群と表面群の付近には、「家庭を大切にする」「子供とよく

TABLE 3 交友関係の4群における、望む生き方の選択率(%)

		独立	個別	密着	表面	χ^2 値
金持ちになって豊かに暮らす	男	35.0	35.1	63.6	51.5	17.52**
	女	37.6	20.0	41.9	36.2	9.29*
仕事をバリバリこなす	男	23.0	33.8	28.8	42.4	7.44
	女	17.2	18.7	18.9	29.0	3.92
仕事と家庭を両立させる	男	36.0	40.3	57.6	56.1	11.30*
	女	33.3	32.0	24.3	36.2	2.63
子供とよく遊ぶ	男	31.0	41.6	60.6	54.5	17.21**
	女	43.0	46.7	67.6	66.7	16.02**
家庭を大切にする	男	40.0	61.0	69.7	69.7	21.00**
	女	57.0	60.0	77.0	81.2	15.61**
周囲との調和を考えて生きてゆく	男	16.0	39.0	31.8	43.9	17.96**
	女	29.0	37.3	39.2	59.4	15.72**
有名になる	男	15.0	20.8	15.2	21.2	1.84
	女	7.5	9.3	5.4	8.7	0.93
国際社会で活躍する	男	15.0	24.7	19.7	24.2	3.28
	女	16.1	10.7	13.5	15.9	1.26
社会や人のためにつくす	男	10.0	26.0	15.2	28.8	12.39**
	女	17.2	18.7	12.2	13.0	1.73
環境問題に取り組む	男	15.0	22.1	15.2	21.2	2.29
	女	10.8	20.0	5.4	11.6	7.80
社会改革をめざして活躍する	男	4.0	15.6	6.1	6.1	9.09*
	女	2.2	1.3	0.0	1.4	1.53
学問の研究を通して真理を明らかにする	男	7.0	11.7	1.5	6.1	5.88
	女	5.4	6.7	1.4	0.0	6.64
自分の楽しみを追及する	男	36.0	48.1	45.5	53.0	5.28
	女	36.6	29.3	31.1	52.2	9.38*

df=3, ** p<.01 * p<.05

FIGURE 2 交友関係の4群と望む生き方の関係—男子—(横軸, 解1; 縦軸, 解2)

遊ぶ」「自分の楽しみを追及する」「周囲との調和を考えて生きてゆく」などの家庭志向的、私生活志向的な生き方や「仕事をバリバリこなす」などが布置している。

各交友群に近在する生き方をみると、独立群には、「国際社会で活躍する」が近在している。密着群に最も近在しているのは「子供とよく遊ぶ」である。表面群

は「周囲との調和を考えて生きて行く」「仕事をバリバリこなす」が特に近在している。個別群に近在している項目はないが、原点から個別群に向かう方向に「環境問題に取り組む」が布置している。

男女の交友群のプロットを比較すると、男子の表面群が個別群と近接しているのに対し、女子の表面群は密着群と近接しているという違いがみられる。

FIGURE 3 交友関係の4群と望む生き方の関係—女子—(横軸, 解1; 縦軸, 解2)

考 察

交友関係の類型について

交友関係に関する項目に対して数量化Ⅲ類による解析を行ったところ、第1軸が友人への同調、第2軸が友人との距離に関する軸であると解釈され、同調性と心理的距離のとり方の2側面が独立していることが明らかになった。この結果は、友人と内面的には心理的距離をとりたいと考えながら、行動的には同調的であ

ろうとする青年が存在していることを示している。すなわち、青年の交友関係において、内面的な密接さと外面的な行為とが区別されていることが明らかにされた。

そこで両概念の組合わせにより、交友関係を独立群、個別群、密着群、表面群の4群に類型化した。質問項目への回答に基づいて被調査者を上記の4群に分類したところ、各群の構成において、男女や学年の比率に違いはみられなかった。したがって、交友関係の4群

の差異は、性役割や発達段階によるものではないと推定される。

交友関係の4群の特性

心理特性や望む生き方との関連分析の結果から、交友関係の4群の特性をまとめると、以下のようになる。

独立群は、友人と心理的距離をとらないが、同調性が低い交友群である。この群は、男女ともに、公的自意識と家庭適応が低かった。家庭内よりも友人関係の中でより快適に、自由に振舞える群であると考えられる。男子では、劣等感も低く、望む生き方に関する双対尺度法の結果をみると、「自分の楽しみ」が近在していた。また女子では、双対尺度法の結果、「国際社会で活躍する」が近在していた。以上の結果からみると、独立群は、家庭から離れた活動的な生き方を望んでいると考えられる。

個別群は、友人と心理的距離を大きくとり、同調的な行動をとらない群である。この群は男女ともに公的自意識が低かった。男子では、劣等感と問題行動念慮も低く、双対尺度法の結果をみると、「国際社会」「仕事」「周囲との調和」「社会や人のため」が近在していた。また「社会改革」の選択率も高かった。女子は、双対尺度法の結果、「環境問題」との関連の強さがみられた。また「金持ち」になることを選択率が低かった。個別群は、男女ともに社会貢献的な生き方を望む傾向が強く、男子では比較的精神的にも安定している。他の群に比べて、最も精神的に自律した群であると考えられる。

密着群は、友人との距離をとらず、同調的な群である。この群は男女ともに公的自意識が高く、双対尺度法の結果、「子供と遊ぶ」等の家庭的な生き方を望んでいた。さらに男子では、「金持ち」の選択率が高く、双対尺度法の結果でも、「金持ち」と近接していた。密着群は、身近な狭い周囲の世界に埋没し、私生活を楽しもうとする私生活主義を有していると考えられる。

表面群は、友人との心理的距離を大きくとろうとしながら、行動的には同調的であろうとする群である。この群は男女に共通する心理特性として、公的自意識が高かった。双対尺度法の結果をみると、「家庭を大切に」や「子供と遊ぶ」など家庭志向の生き方が近在していると共に、「周囲との調和」や「仕事」も近在し、適応的な生き方を望んでいると考えられる。さらに男子では、劣等感や問題行動念慮が高く、「家庭と仕事の両立」や「社会や人のため」の選択率が高かった。一方、女子は家庭適応が高く、「自分の楽しみを追求する」生き方の選択率が高かった。表面群は男女ともに、家

庭志向であると同時に仕事や周囲との調和も望んでいる点で共通している。しかし女子が家庭適応的で自分の楽しみを追究しようとする傾向が強いのに対し、男子には心理的な葛藤がみられるという点で違いがみられる。

以上、4群の特徴をまとめると、まず独立群は家庭適応が低く、社会活動を好む傾向が強い。個別群は社会貢献を望む傾向が強く、男子では比較的精神的にも安定している。密着群は私生活主義的な傾向が強い。表面群は家庭志向であると共に、仕事や周囲との調和を好む傾向も強く、男子においては心理的な葛藤が強くみられた。

また、同調性の高い交友群（密着群、表面群）に共通する特徴として、他者の視線を強く意識していることも明らかになった。友人からの評価懸念の強さが、同調的な態度を引き起こしていることが推察される。さらにこの両群は、共に家庭中心の生き方をより強く望んでいた。従来の研究において、現代青年の特性として社会への関心の希薄さが論じられているが（岡田, 1991; 久世他, 1986）、家族や友人といった狭い範囲に関心が留まっていることが、自意識を高め、同調性を引き起こしている可能性が考えられる。

表面群の問題

以上のように本研究の結果から、交友関係の各群の心理特性や希望する生き方の違いがみられたが、特に注目されるのは表面群の特性である。

表面群は、友人との心理的距離が大きい一方で、友人への同調性が強い群であり、現代青年の交友関係の特徴として論じられている2側面を合わせもつ。この表面群の青年は、家庭を中心に社会と距離をおいて接することを望む傾向が強い。特に女子は家庭適応が高く、将来も家庭を大切にしたいと考える傾向が強かった。しかし一方では他者の目を気にし、他者との調和も大切にしており、行動上では優等生的である。すなわち表面群は、同調行動をとってはいるが、集団中心の生き方を望んでいるのでも、協同的であるのでもなく、心理的には友人たちと離れていて、ただ集団から外れまいと群れ集まっているだけであると推察され、「群れ志向」と呼称すべき傾向をもっていると考えられる。しかし、このような家庭志向、社会適応的な群れ志向の中で、男子は劣等感や問題行動念慮をもち、精神的な問題を抱えていた。

この結果は、堀・松井（1981）において「クールな交友」をする群が、強い精神的な疲労感を示したと一致している。しかし堀・松井の分析が性別を分けず

に行われたのに対し、本研究では男女別に検討したため、男子にのみ問題がみられることが明らかになった。男子に対しては一般に社会的な貢献をすることが期待されている。表面群の男子は、家庭に閉じこもりたい気持と同時に、社会的な承認を強く求めるため、社会進出への期待に応えようとし、心理的な葛藤が起っていると推察される。表面群男子の望む生き方が、女子に比べると社会貢献的な生き方に傾いていたことは、この推察を支持していると考えられる。この男子にのみ問題行動念慮がみられた原因については、さらに実証的な研究をもって検討する必要がある。

本研究の意義と今後の課題

以上、本研究では、無作為抽出調査によって、青年期の交友関係を、友人への同調と友人との距離のとり方の2点から類型化し、心理特性等との関連を実証的に検討した。その結果、類型化された各交友群間に心理特性や希望する生き方の違いがみられた。特に現代青年の特徴とされる、心理的距離をとる一方で同調的な交友関係をもつ表面群には、家庭志向や精神的不安定さ等の特徴がみられた。従来から現代青年の交友関係の特性として同調性と心理的距離の大きさが論じられてきたが（岡田, 1992; 東京都生活文化局, 1985）、本研究で、両側面を組合わせて検討したことにより、表面的な交友をする青年の心理的特性と問題点とを明らかにすることができたといえよう。

本研究の問題点としては、本研究で使用した同調と心理的距離を測定する項目の数が少なかったことが指摘される。今後、本研究で設定した類型のような交友関係の個人差が生じる原因について、仮説検証的な研究を行うことが望まれる。

引用文献

- 堀 洋道・松井 豊 1981 学校や交友関係の実態とその影響 学習指導研修, 4(2), 90-93.
久世敏雄・宗方比佐子・和田実・後藤宗理・浅野敬子・

- 宮沢秀次・二宮克美・大野久・内山伊知郎・鄭曉齊 1986 現代青年の社会意識 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 34, 25-39.
西里静彦 1982 質的データの数量化—双対尺度法とその応用— 朝倉書店
岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, 1, 11-18.
岡田 努 1992 友人とかかわる 松井豊(編) 対人心理学の最前線 サイエンス社 Pp.22-29.
菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-187.
竹村和久・高木 修 1988 “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究, 36, 57-62.
東京都生活文化局 1982 大都市高校生の性をめぐる意識と行動—その実態と生活環境・心理的特徴などとの関連— 同局発行
東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析— 同局発行
松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学 ハンドブック 川島書店 Pp.283-296.

付 記

本研究は株式会社ライフデザイン研究所の委託研究として、福富護・松井豊・加藤千恵・上野行良・上瀬由美子によって実施された「現代高校生の生活環境」の結果を再解析したものである。本論文の作成にあたっては、第1著者がデータ解析を行い、執筆した。

(1993.6.14受稿, 12.20受理)